SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

援助要請の諸相と陥穽：中谷・岡田論文と永井論文へのコメント

メタデータ	言語: ja 出版者: 心理学評論刊行会 公開日: 2021-03-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 橋本, 剛 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00027895

本著作物の著作権は心理学評論刊行会に帰属します。ご使用にあたっては「著作権法」に従うことをお願いします。
引用情報：橋本　剛 (2020). 援助要請の諸相と陥穽―中谷・岡田論文と永井論文へのコメント―　心理学評論, 63(4), 497-502.

Japanese Psychological Review
2020, Vol. 63, No. 4, 497–502

援助要請の諸相と陥穽
―中谷・岡田論文と永井論文へのコメント―

橋　本　　剛
静岡大学

学業的援助要請を論じた中谷・岡田（2020）（以下，中谷・岡田論文とする）と，臨床心理学の観点に基づく援助要請を論じた永井（2020）（同じく永井論文とする）は，テーマや領域は違えども，ともにメタ分析などを活用して，国内外の広範にわたる援助要請研究について的確に概説した秀逸なレビューである。両論文はともに，援助要請研究に興味関心をもつ多くの読者に有用な情報とヒントを提供するものであり，その論点をさらに掘り下げることで，各領域の援助要請研究がさらに発展していくことが期待されよう。

しかし残念ながら，著者は教育心理学や臨床心理学についての見識が不足しており，それらの専門性を基盤としつつ，さらに深く掘り下げるような議論を展開するだけの力量を持ち合わせていない。そこで本稿では，両論文を掘り下げるよりも，あえて俯瞰してみることで，援助要請とは何なのか，多少毛色の違う観点から論じてみたい。あくまで仮説の域を出ない試論であり，説得力や妥当性に欠ける側面も多々あろうが，このような場，このような機会だからこその議論ということで，両論文の著者および読者諸氏ともども，どうかご海容頂ければ幸いである。

学業的援助要請における社会性の影響
―中谷・岡田論文へのコメントを中心に―

まずは中谷・岡田論文について論じるところから始めたい。学業的援助要請は教育心理学領域において，自己調整学習方略のひとつとして論じられることが多く，その観点に立てば中谷・岡田論文は「効果的な学習方略とは何か」という問題意識を基調としたものと認識されるかもしれない。しかし，同論文でも示されているように，学業的援助要請は学業目標と社会的目標の両方と連動するものであり，それは学業的援助要請を，学業達成のみならず，社会的適応の観点からも論じるべきであることを示唆している。そもそも人間の学習行動を特徴づけるのは，その社会性である。人間の高度で複雑な文化や社会は，観察学習から教育制度に至るまで，人間の社会性を基盤とした教育によって成り立っている（安藤，2018）。人間の学びの多くは社会性を基盤としたものであり，同時に，人間の社会には教育という名の協力行動が必要不可欠である。それゆえ，教育場面における援助要請のあり方について，教育効果などの議論のみならず，時代や文化による変遷などの観点から論じてみるのも，人間の社会や文化の理解を深める上で，興味深いものとなり得よう。

さて，中谷・岡田論文では，第I部の主たる知見として，熟達目標（特に熟達接近目標）は利益認知を高めやすいので適応的援助要請と結びつく一方で，他者からの脅威認知と連動する遂行回避目標は，援助要請回避と結びつくことが見いだされている。次に第II部では，適応的援助要請が社会的発達目標によって促進される一方で社会的呈示目標によって抑制されること，さらに社会的呈示目標は依存的援助要請や援助要請回避に結びつくことが指摘されている。加えて，教師の情緒的サポートが適応的援助要請を促進すること，および仲間風土や教室環境などの文脈の重要性も指摘されている。これらは総じて，熟達志向に代表される個人の前向きな学業達成態度，および周囲との良好かつサポーティブな関わりが，適応的な援助要請を促進すると概括されよう。

このように中谷・岡田論文では，学業的援助要請と目標との対応について，説得力のある議論が展開されている。そこで，次に気になるのが，それらの諸目標の規定因は何なのか，という疑問である。「熟達目標が適応的援助要請に繋がるので，熟達目標志向的な教室風土の醸成が求められる」ならば，そのような教室風土は，どのように醸成

されるのであろうか。「友人間で思いやりが価値づけられることで学習資源の共有が促進される」ならば，思いやりが価値づけられる友人関係は，どのように形成されるのであろうか。社会的呈示目標は不適応的な援助要請と関連するにも関わらず，児童生徒が社会的呈示目標を意識してしまうのは，なぜなのだろうか。

それらを考えるためには，学業的援助要請を自己調整学習の一環という枠組みで論じるだけでは不十分であるように思われる。確かに，学業的援助要請は自己調整学習の一方略として位置づけられよう。しかし，学業的援助要請は，それ以外の何物でもない，という訳ではない。学業的援助要請ともみなされうる対人的相互作用が，実は他の児童生徒への同調行動，もしくは教師への迎合行動などといった，自己調整学習方略以外の意味合いを持ちうることもありえよう。依存的援助要請は，自己調整学習の観点からは好ましくないかもしれないが，友人関係の円滑化や親密化には，ときに有効な方略になり得るのかもしれない。中谷・岡田論文の冒頭では「学業的援助要請は，カウンセリングの相談や，対人関係の維持などのための社会心理学的な援助要請とは異なる性質を持つ」という趣旨の記述がある。しかし，援助要請として行われる対人的相互作用が持ちうる意味や効果は，研究者が焦点化する側面に限らず多種多様であり，よって学業的援助要請を「社会心理学的な援助要請とは異なる性質を持つ」と排他的にとらえるのは，それらの多種多様な意味や効果の看過に繋がるようにも思われる。

特に援助要請の抑制・回避は，他者心理の推測ゆえに生じる部分も大きい。教室内の援助要請場面には，被援助者と援助者という当事者に加えて第三者も多数おり，そのそれぞれが，各々の行動を解釈し，さらに他者がどのように解釈しているのかまで推測しあう。ベタな譬えをすれば「わからないところを教えてもらうフリをして，実は意中の人との親密化を進める会話のチャンスを窺っている，と第三者に思われてしまうのではないか，という推測をしてしまうことで援助要請を抑制してしまう」ということも生じうる。さらに，他者心理の推測には文化差などもあり，本特集の新谷論文（新谷，2020）でも指摘されているように，東アジアでは相対的に，自身よりも他者を優先することが文化適合的という側面もある。それらの知見と照らし合わせると，児童生徒が，学業達成目標よりも社会的呈示目標を優先するような判断や行動をしてしまうことも十分考えられよう。

学業的援助要請の背景にある諸目標の相対的優先度や，その規定因まで話を拡げることは，この研究領域における文脈や興味関心の範疇から逸脱しているかもしれない。しかし，現実の的確な把握，および実践的な方策の模索のためには，あえて境界線を超えていく試みも，ときには有用かもしれない。

臨床心理学領域の援助要請研究が目指すものは
―永井論文へのコメントを中心に―

次に永井論文について論じたい。「援助要請の生起」「援助要請の促進」「援助要請と適応」という3つの問いを中心として，臨床心理学領域の援助要請研究をレビューした同論文で興味深いのは，臨床心理学における援助要請への自己懐疑的な観点を含めた後半の議論である。援助が格差や価値観の固定化などに繋がる可能性，依存性や過剰性にまつわる問題などの指摘は，臨床心理学領域における援助要請研究の暗黙の前提に挑んだものとして，まさしく本特集のコンセプトに合致するものと言えよう。

その暗黙の前提とは，端的に言えば「援助要請は推奨・促進されるべき」という想定である。同論文の3つの問いのうち「援助要請の生起」「援助要請と適応」の2つは，臨床心理学に限らず，援助要請研究全般に共通する問いであろう。しかし「援助要請の促進」という問いの背景には，「援助要請は促進すべき」という暗黙の価値観がある。援助要請の促進こそが援助要請研究の目標という価値観に基づけば，その想定で何ら問題なかろう。しかし，もし援助要請研究の目標が人々のウェル・ビーイングの維持・促進であるならば，援助要請はあくまでそのための手段のひとつであり，援助要請の促進がかえってウェル・ビーイングを阻害・悪化させる可能性も含めて論じられるべきであろう。

実際に永井論文の後半は，そのような観点の重

要性が丁寧に論じられている。援助要請に応じて提供された援助が無力もしくは不適切となることもあれば，援助そのものは適切でも，それがいびつなパワーバランスと連動することもある。過剰型や依存型の援助要請スタイルは，かえって不適応を促進する可能性もある。援助要請の啓発やニーズ創出による副作用の可能性も含めて，適度・適切な援助要請のあり方を柔軟に考慮することの必要性を指摘した同論文は，臨床心理学的な援助要請研究もまた，社会文化的側面まで考慮して，より広い視野を持つべきであることを示したものと言えよう。

しかし，それらを考慮するために，具体的にどのような社会文化的要因を扱うべきかについて，同論文はまだ限定的な議論に留まっている感も否めない。たとえば，中谷・岡田論文では，適応的援助要請を促進するために熟達目標を促進する教室風土の醸成が重要であると主張されており，これは援助要請の規定因として，教室という環境要因の重要性を指摘しているとも考えられる。それに対して，永井論文で援助要請の規定因として論じられているのは，主に援助要請者の個人特性や属性といった内的要因である。この差異は，学業的援助要請では「学校」「教室」という環境要因が明確かつ具体的であるのに対して，心理的援助要請では，その環境や文脈が多様，複雑，不明瞭となりがちであることによるのかもしれない。しかし「環境要因が捉えがたい」ということは，「環境要因が存在・影響しない」ということと同義ではない。そして，外的要因の重要性が的確に把握されないままに，相対的に内的要因に過剰に帰属してしまうならば，そこには基本的帰属錯誤や対応バイアスのような帰属の歪みが生じうる。ひいてはそこに起因する内的要因の過大視が，「援助要請や援助授受は自己責任であり，援助要請の抑制も本人の責任である」といった心理主義的論調に与するものとなりかねない，というのは杞憂であろうか。もちろん，メンタルヘルスリテラシーや援助要請スキルなどの啓発や育成も，ある程度は必要ではあるが，援助要請を個人内の知識や技能で論じるそれらのアプローチには，そのような論調を助長させうる懸念もある。

幸い永井論文はそのような懸念にも自覚的であり，たとえば「個人の援助要請を促進しようとする試みが，暗に援助要請の実行が援助要請者自身の責任であるというメッセージになりうる」という記述もある。また，だからこそ後半では，社会文化的要因の重要性について，さまざまに指摘されている。しかし，臨床心理学を中心とした心理学という学問やその実践全般が，製薬会社の例として言及されている「啓発がもたらす過剰なニーズの創出」と同様の構造を有していないかは，やはり気になるところである。臨床心理士や公認心理師という制度やシステムの普及によって，種々の事象を個人の心理的問題として理解しようとする傾向が社会で強まりうることに，はたして心理学はどの程度自覚的であろうか。心理学という学問にはその性質上，良くも悪くも，人間の内的要因や主体性を過大評価しやすい傾向がある。公認心理師制度の拡充をはじめとする専門的対人援助の促進・普及は，身近な人間関係における助け合いが期待できない状況にある人々にとっては，福音となるのかもしれない。しかしそれは同時に，種々の問題をあくまで当事者内部の心理的問題と見なして，その対応もまた自己もしくは専門家に委ねられるべきとするような社会システムを拡充する一方で，身近な対人関係における相互扶助機能のさらなる弱体化を招くかもしれない。そして，昨今の疲弊著しい教育現場などと同様に，専門的対人援助のシステムもまた，過剰な要求や過度の効率主義による疲弊を経て，やがて機能不全に陥ることも懸念される。

その意味において，社会文化的要因が人々の心理にどのような影響を及ぼすのか，という観点のみならず，臨床心理学を代表とする心理学のあり方が，社会や文化にどのような影響を及ぼしうるか，という逆方向も視野に入れた双方向的観点も，援助要請研究では求められよう。これは言うなれば，「もうひとつの臨床社会心理学」と言えるかも知れない。日本において，臨床社会心理学とは，社会心理学の理論や知見を，臨床実践に活用していく学問として定義されることが一般的であった（坂本，2004 など）。しかし，臨床心理学的な知見や実践が，人々の社会や文化にどのような影響を及ぼしうるのかという逆方向もまた，現代社会のあり方や今後の方向性を論じる上で，重要な観点ではないだろうか。

もちろん，「今，ここ」にある心理的問題を，

なるべく速やかに軽減することも重要であることは言うまでもない。しかし，中長期的な，そして広範にわたる対人関係や社会の安定もまた重要である。そして，今，ここでの援助要請や援助授受が，「今，ここ」でプラスに働くとしても，それ以外の部分でマイナスに働くならば，そのバランス次第で，援助要請や援助授受が抑制されることも当然考えられる。その意味において，「今，ここ」にある問題にのみ焦点化するアプローチや説明に，一定の限界があることは否めないであろう。

依存的援助要請は抑制されるべきか

ここからはさらに，両論文を包括しながら議論を進めたい。

中谷・岡田論文の「援助要請の質やタイプ」と，永井論文の「援助要請スタイル」に関する議論（以降便宜上，援助要請スタイルと包括する）は，実質的に類似した内容を扱っていると考えられよう。それらはともに，依存的および回避的な援助要請スタイルを基本的に好ましくないものと見なしている点で共通している。まず中谷・岡田論文では，依存的援助要請と援助要請回避はともに自己調整学習の観点に立てば不適応的であり，さらに依存的援助要請は学業成績の低下を予測し，他者評価にもネガティブな影響をもたらしうることが指摘されている。また，永井論文では，これらがそれぞれ，援助要請過剰型と援助要請回避型という名称で論じられている。しかし名称は違えども，自力解決のための努力を放棄して安易に援助を求める過剰型は，不適切な振る舞いをしてしまうことも多く，自身の成長機会を損なうのみならず，周囲をも疲弊させうることが指摘されている。

永井論文の結論部にもあるように，適度こそが適切であれば，過少方向（援助要請回避）であれ過剰方向（依存型や過剰型）であれ，逸脱の程度が著しくなるほど不適応的と見なされるのは自明である。しかし，誰もが程よいさじ加減で援助要請できるようになることを目指す，という方向性は，はたして現実的なのだろうか。誰もがアサーティブに，適応的かつ自立的な援助要請ができるようになり，依存的もしくは回避的な援助要請は是正されることが，目指すべき理想なのだろうか。援助要請者自身の学業達成や心理的適応のみを指針として考えればそれでよいのかもしれないが，現実的には違和感も否めない。

その違和感の理由をいくつか挙げてみよう。まず考えられるのは，どの程度の援助要請を適切と見なすかには個人差があり，よって適度な水準を一義的には定められないという問題である。個人差要因の代表であるパーソナリティについて考えてみると，つい援助要請を抑制してしまうシャイな人から，依存的な援助要請をも厭わないいわゆる「うざキャラ」まで，あらゆる人々がいるのが人間社会である。それらの分散を無視して理想像を一義的に定めることは，非現実的であるのみならず，理想像に沿わない人々に不本意かつ過剰な同調を強いるような，不寛容な風潮を増幅させる怖さもある。また，援助要請できないシャイな人との関わりを通じて育まれる気遣いもあれば，図々しいからこそぶつけ合える本音もあるだろう。理想像を一義的に定めて社会の不寛容性を潜在的に増強するよりも，あらゆる援助要請のあり方を受け入れられる寛容な社会を目指すという方向性も，それはそれで難しい部分もあるが，一考に値するのではないだろうか。これは同時に，「個人に何を求めるか」のみならず，「どのような社会を目指すか」もまた，研究者が考えるべき課題であることを意味している。

たとえば，中谷・岡田論文でも指摘されているように，学業的援助要請を適切に行うためには，直面している問題について，自身がどこまで理解できているのかを的確に把握した上で，誰にどのように援助を要請すれば，自身のニーズに対応した反応を得られるのかを推測して，要請行動を遂行することが求められる。ここにはかなり高度なメタ認知が必要であり，万人にそれを求めるのは難しいようにも思われる。一方，仮にそれらの認知処理が困難であっても，それらも含めて他者に「丸投げ」してみるのも，ヒューリスティックとしては有効なのかもしれない。そして，それが依存的援助要請と称されるものの一側面なのかもしれない。ここでは，学業達成が援助要請の質やタイプによって規定されるという因果関係のみならず，学業達成は基本的学力や認知要因の個人差に起因しており，援助要請の質やタイプは，それら

の関連の媒介要因，もしくは表現型に過ぎない，という解釈も考えられる。そうであれば，認知処理の能力や資源が高くない人々にとっては，無理をして適応的援助要請を試みるよりも，依存的援助要請を用いる方が，現実的かつ適応的なのかも知れない。

援助要請研究のニーズが意味するものは

援助要請研究が目指しているのは何なのか。そこには2つの哲学があるように思われる。ひとつは，個人が主体的に問題や困難を乗り越えられるように，そのレパートリーの一つとして，援助要請が重要であるという考え方。これはいわば，「社会の荒波を乗り越えるために，個人の資質を高める」ような考え方であり，自律的援助要請や適応的援助要請を好ましいと見なすスタンスは，この考え方と合致するであろう。

しかしもうひとつの考え方もあり得る。誰もが生きていける社会を実現するためには，苦境にある人々を支援するしくみが必要だが，他者の困窮に気づくことは難しいことも少なくない。そこで困窮者が自ら窮状を訴えることができれば，他者が手を差し伸べられる可能性は高まるので，援助要請が重要となる，という考え方である。これはいわば，「あらゆる人々を守るために，社会の仕組みを整える」ような考え方と言えよう。そしてこの場合は，自律的でなくても，依存的援助要請でも構わないように思われる。

自力での問題解決能力の育成は，心理学の研究枠組みと相性がいい。それは自力を前提とするが故に，問題解決に必要な個人内要因は何か，という説明になるからである。その一方で，困窮者に手を差し伸べるための一手段として援助要請をみなせば，そこで検討すべきは，困窮者自身の内的要因よりも，むしろ困窮者を動かす状況要因である。「どのような状況要因が，人々に援助要請させるのか」という問題意識になる。行動経済学などで言われるナッジの考え方に近いであろう。ただしこれは，人間の心理や行動を社会状況要因から説明しようとする社会心理学にはなじみ深いスタンスであるが，教育心理学や臨床心理学を含めたその他の心理学では看過されがちかも知れない。

だからこそ，それらの領域においても社会文脈的要因が重要であることを指摘した両論文の意義を改めて強調しておきたい。しかし，そこで最終的に目指すところが，「個人の」学業達成やウェル・ビーイングに限定されると，そこで掲げられた価値観に合致できる人々は救われるかも知れないが，合致しない人々は置き去りにされることになりかねない。そして人間には，必ず分散がある。そこで誰も見捨てない，みんなで前に進んでいくためには，個人に理想を求めるよりも，あらゆる人々に目配せして，必要であれば肩を抱いて寄り添うような，社会的なしくみの方が求められるのではないだろうか。もしかしたら，気遣い，遠慮，忖度といった日本の旧来的な人付き合いの流儀は，苦境にある人々が自ら援助要請せずとも，周囲の人々が積極的に援助の手を差し伸べることを可能にする「見守り」のシステムとして機能していた側面もあるのかも知れない。しかし，あまりにも多忙であり，かつ個人の自由や権利が重視される現代社会では，もはや「見守り」が機能しにくい状況であり，だからこそ困窮者が自ら声を上げる援助要請が重要となっているのかもしれない。そう考えると，援助要請研究のニーズが高まることは，もしかしたら寂しいことなのかもしれない，とも思える。

もちろん，自律的援助要請，およびその背景にある自己主張も大切である。しかし，それが過度に偏重されてしまうと，自己責任論によって困窮者がますます声を上げられなくなってしまう。それは結果的に，誰も置き去りにしないための一手段として援助要請を位置づけるスタンスには相反することになりかねない。それを防ぐには，自律的でも依存的でも，どんな援助要請でも許容しうるようなしくみを，社会が整える必要がある。ただ，それはそれで，クレーマーや不要不急の援助要請を増やしかねないというリスクもある。結局のところ，これらはトレードオフの関係にあり，片方を優先すればもう片方が損なわれるのであろう。だとすると，最終的に重要なのはバランスである。自助・共助・公助のいずれも，いずれかを理想像として偏重してしまうと，その理想に適合しない人々を困惑させることになりかねない。だからこそ，特に実践領域の心理学は，自らが暗黙のうちに前提としている価値観に対する懐疑的観

点をも許容・維持し続けることが求められよう。

心理学に限らず，応用・実践的領域になるほど，そこで掲げられる目標や価値観が前提化され，それは同時に，いわゆる「結果を出す」「役に立つ」ことに縛られることとなり，探求の視野が狭くなるというパラドックスが生じるのかもしれない。しかし，即時的な成果や有用性を過度に偏重するスタンスは，中長期的には学問全体を危機に陥れる（毎日新聞「幻の科学技術立国」取材班，2019）。目先の利益ばかりを追いかける「近視眼化」（下條，2017）は，科学研究や大学教育の中長期的衰退を招きかねない。グローバル化やIT化によって世界は人間の想像力を超えた拡張状態にあり，だからこそ人々は，自身が把握・理解可能な限られた世界内での正義や助け合いを優先してしまい，そこに含まれなかった世界は切り捨てられる。そこから得られるのは，下條（2017）言うところの「局所解（狭い範囲では最適解だが，よりグローバルにみると最適ではなく，害すらある解）」であろう。しかし，そもそも人間は多様な目標や価値観の中で，それらの矛盾や葛藤に逡巡しながら生きる存在である。コロナ禍における感染回避と経済活動のトレードオフでも，結局のところは，どちらかに偏ることなく，その都度折り合いを付けながらやっていくしかない。

もちろん，各領域がそれぞれの価値観や目標に基づく議論を深め，知見を蓄積していくことは重要である。しかし，自身の専門領域に過度に傾倒し，専門領域外において生じうる副作用への想像力を失うことは危険であろう。その意味においても，多様な領域における助け合いの議論を寄せ集めた本特集が，助け合いは大切だと独善的に主張することの怖さを，そしてそれを自覚した上で心理学が進むべき今後の方向性を，再考するための一助となれば幸いである。

謝　辞

本研究はJSPS科研費JP19K03190の助成を受けている。

文　　献

安藤寿康（2018）なぜヒトは学ぶのか―教育を生物学的に考える―　講談社現代新書.

毎日新聞「幻の科学技術立国」取材班（2019）誰が科学を殺すのか―科学技術立国「崩壊」の衝撃―　毎日新聞出版.

永井 智（2020）臨床心理学領域の援助要請研究における現状と課題―援助要請研究における3つの問いを中心に―　心理学評論，*63*, 477–496.

中谷素之・岡田 涼（2020）学業的・社会的領域の目標と学業的援助要請に関する包括的レビュー：援助を求めることは常に最善か？　心理学評論，*63*, 457–476.

新谷 優（2020）助け合いの文化心理学　心理学評論，*63*, 329–345.

坂本真士（2004）新しい領域：臨床社会心理学とは　坂本真士・佐藤健二（編）はじめての臨床社会心理学　有斐閣 pp. 1–18.

下條信輔（2017）ブラックボックス化する現代　日本評論社.

― 2020. 11. 5　受理 ―